

「んうっ……!!」

ねちゃりとした感触に、唇を奪われた。鼻腔を刺す酷い酒気に目を瞑るよりも早く、分厚い舌が生温い唾液を伴って口腔に押し込まれる。

生臭い吐息が、引き攣った顔にかかる。べちゃべちゃと汚らしい音を立てながら、ざらついた舌に口腔を犯される。流れ込む唾液はニンニクと腸詰肉の味がして、吐きそうになる。息もまともにできず、意識が飛びそうになっていく。

「んぐうううっ!!」

遠くから、獣めいた唸り声が轟く。せめてグレンの目には入らずに済むよう、宏正は願った。

ぬめる舌が唇を這い回って、気持ち悪い。無精髭が刺さって痛い。じゅるる、と唾液を吸い上げる音に怖気が走る。早く終わってくれと心で叫ぶも、届くはずもなかった。

長い蹂躪の末、ようやく男は唇を離れた。臭い吐息の混じらぬ空気を必死に吸い込むうちに、目元から涙が溢れ落ちた。

初めてのキス、だった。報われないと知りながら密かに立てていた操は、一瞬で汚

泥にまみれた。

「下手くそなキスだな。処女かよ」

男は嘲笑を落とすと、懷から何かを取り出した。

「っ……!!」

用具としてのナイフだ、刃渡りは短い。なのに、あの形の刃物を見ると、どうしても体が竦んでしまう。

「なんだ、こんなものが怖いのか？」

わざと目の前でちらつかされて、顔が強張ってしまう。男はひひ、と笑うと、

「安心しろよ。痛いどころか、天国へ連れて行って差し上げるからな」

「あ!？」

ジャーキンベストのボタンが、外されていく。焦茶色の革を開いた下、ナイフの先端が、ライトブルーの編み上げシャツの交差する紐にかかる。

「怪我したくなきゃ、大人しくしてろよ」

冷たい金属が微かに肌へ触れただけで、短い悲鳴を上げてしまいそうになる。さく、さくと紐が断たれる音が連続する。僅かに胸元が覗くだけでも体が強張るというのに、

男はシャツを持ち上げると、

「やめ……!!」

中心にナイフを当て、縦に切り裂いた。誇りある制服に似せた色合いの服は、いとも容易く破られてしまう。

「見ろよ、この乳首！ 大きさも控えめだし色も薄いし、育て甲斐あるぞ」

「すげえ筋肉ついてんな。さぞかしいもん食ってきたんだろうよ」

見知らぬ男たちに囲まれて、体の部位を性的に品評される。明確に物として扱われる屈辱に、体が打ち震えてしまう。

「どれどれ」

つんと右の乳首の先を指で突かれ、得体の知れない気持ち悪さに鳥肌が立つ。更にぐりぐりと捏ね回され、痛みと悲鳴を堪えて歯噛みするが、顔に出ていたのだろう。

右脚を抑えている男はくく、と笑い、

「勇者様は気持ちよくねえってよ」

「うるせえな、これからだよ」

「ひっ!!」

中心の男が屈むなり、反対の乳首を咥えられる。右の乳首を責める指先はそのままに、れろれろべちゃべちゃと無遠慮に舐め回され、快感どころか、あまりの悍まじさに叫びたくなる。

それを左右で繰り返し、やっと離れた頃には、唾液まみれになった両方の乳首はてらてらと艶やかに濡れそぼっていた。解放されて息をつく間もなく、ぬめる乳首を指でつままれた、瞬間、

「あっ!？」

胸元から、びりりと痺れが走った。

——何だ、これ。

「ほらな？」

呆然とする宏正を証拠として、男は自らの手管を自慢する。それでは終わらず、

「ひ!? そこは、あ、や、あっ!？」

一方はくりくりと捏ねられ、反対は爪で先端をかりかりと引っ搔かれ、悲鳴に嫌悪以外の色が混じり始める。初めて覚えた感覚に身悶えするが、縄で結ばれた両手は頭の上で押さえられ、両脚はがっちり抱えられている。

薄茶色の乳首が赤味を帯びるほど充血した頃に、男の指が離れた。空気に触れるだけでも、ひりひりして痛い。けれどそれだけではない感覚が、確実に宏正の体を犯し始めていた。

——違う。こんなのは、絶対に違う。

無言で首を横に振って、這い寄る何かを振り払おうとする。

性行為は、愛し合う者同士でするものだ。会ったこともない人間から一方的に弄ばれた拳句、見せ物として晒される。そんなものでは、決してないはずだ。

だが、拒めばグレンが殺される。抗えば、酔客の血が流れる。

——どうしよう。どうすればいい、風。

しかし、現実には宏正にひとときの逡巡すら与えない。

「なっ」

ベルトの金具が、かちやかちやと鳴り始める。

「そこは……だめだ……」

震える声は無視され、前宛てのボタンが一つずつ外されていく。

「あ、あっ……」

か細い呟きも虚しく、トラウザーズが太腿まで引き下げられた。

「なんだ、勇者様もちゃんと愉しんでおいでじゃねえか」

「ちがう……」

麻のトランクスに覆われた膨らみを指摘されても、力なく首を振るしかない。

「いいから、さっさと見せろよ！ 後詰まってるんだぞ！」

「はいはい、うるせえな」

罵声が浴びせられるが、中央の男は涼しい顔で受け流し、

「それじゃあ皆様お待ちかね、勇者様の大事どころ、ご開帳」

「見ないでくれえっ！」

悲痛な叫びも虚しく、ずるりと下着を引っ張られて、秘すべきそれが男たちの前に晒されてしまう。

「あ……ああ……」

心に罅が入っていく。男は、ぷっと唾を飛ばした掌で宏正の陰茎を握り、

「ひあっ！」

ぐちゅぐちゅと扱き始める。誰にも、風にも触られたことのない箇所が、見知らぬ

男の玩具になっている。気持ち悪くて仕方がないのに、体の芯が甘く蕩け出していることにこそ、宏正は戦慄する。

「ひ、あ、はなし、て、あああっ!!」

離れたテーブルの男が、聞き耳を立てながら旨そうにエールを呑んだ。

「お、いい具合に育ってきたな」

男の手の中で、宏正のものは完全な形を取り戻してしまう。

「へえ。すらっと長くて、お上品な形してやがる」

「綺麗な色だな。まさか、この年で新品か？」

酔漢たちが交わすあまりにも下世話な品評に、耳を覆いたくなる。けれど手首は縛られている上、体は意志に反して昂る一方だった。

ぐちゅぐちゅと水音が強まっていく。先走りが滲み始めている。駄目だとわかって、いるのに止まらない、止められない、

「よし、行け！　ぶち撒けろ!!」

「つく、あ、だめ、あっ、ああああっ!!」

びゅ、びゅる、と大量の白濁が、天井に向けて立てられた男根の先から噴水のように

に撒き散らされた。

嘲笑が、宏正を取り囲む。いつしか、唇の端から血が滲んでいた。

「いいイキっぷりだったな、勇者様」

手淫を施していた男は、一息ついて手の汚れをぴっと払った。

「たっぷり愉しんだんだから、今度は俺にもご奉仕してくれよ」  
にちゃりと笑うと、宏正の剥き出しの尻に手をかける。

「頼む……そこだけは……」

戦慄く声で懇願するも、容赦なく左右に開かれる。

「っ……!!」

外気に晒されたそこをきゅっと閉めてしまいが、男たちの目を楽しませる以外の意味はなかった。

「こっちも新品じゃねえか。見てみろよ、あのびたっと閉じた穴」

「かなりキツそうだな。指一本が精々だろ」

「はは、シワがお行儀よく並んでら。もうすぐぶっ壊れるってのにな」

切れ長の目尻に、涙が滲む。覚悟を決めたつもりなのに、他人の面前でこうまで辱



められれば、心が軋んで仕方がない、だが。

——耐えろ。耐えるんだ。でなければ、グレンが。

猿轡に抑えられた獣の唸り声は、今も遠く響いている。けれど、男たちの哄笑に掻き消されてしまう。

「まあ、まずは試し、だ」

「ぶあっ!？」

声が、濁る。先ほど放ったばかりの精液を絡めた男の人差し指が、窄まりに振じ込まれていく。苦痛は元より、突如侵入してきた異物感が耐え難く、

「それ、やだ、抜いて、ぬいてくれえっ!!」

必死に身悶えするも、手脚を抑えられた状態では腰を振る形にしかない。

「一生懸命誘って、健気なこった」

「いやらしい舞で魔王も魅了しようってか」

こんなに訴えているのに、何故、彼らは聞いてくれないのだろう。何故、笑いながら他人を辱められるのだろうか。

——俺は、あなたたちも守りたかったのに。

潤む視界の先、男は小首を傾げ、

「ん、この辺か？」

「あああっ!？」

男の指先が秘部の奥に潜む一点に触れた、刹那、稲妻めいた快感が脳髓を走り抜ける。

「なるほど、勇者様の弱点はこちらでございますか」

と、慇懃無礼な物言いをする男に、先の場所を重点的に責められる。

直接触れられてもいないにもかかわらず、射精したばかりの男根が再び屹立する。

尻を弄ばれて気持ち悪い、そのはずが、混じり気のない快感が宏正から理性を奪い去っていく。

「あーっ!! 風、なぎ、なぎいっ!!」

声を張り上げて、恋しい親友の名を呼び続ける。

——風なら、どんな時でも笑顔で手を差し伸べてくれる。だが、俺の手は、こんな汚れた手じゃ、もう、風は。

「うるせえな、さっきから」

宏正を取り囲む男のうち一人が、うんざりした調子で吐き捨てた。

「ちょっと黙ってろよ」

男はがちゃがちゃと股間の辺りの金具を外すと、引き出した一物で宏正の口を塞いだ。

「んぐ!？」

突然の臭気と喉奥を突く異物に嘔吐しそうになるも、

「噛んだらあいつを殺すぞ」

今も唸り声が上がっている方向をを親指で示した男に低い声で脅され、噛むどころか身動き一つできなくなってしまう。

刑法一七七条、不同意性交等罪。心身に深い傷を負わせる性犯罪の被害者たちに、警察官として、一人の人間として、真摯に寄り添ってきたという自負はある。だが、本当に被害者たちの恐怖を理解していたのだろうか。だって、知らなかっただろう。尊厳や貞操を踏み躪られる痛みも、触れられた箇所から腐っていくような感覚も、感じてしまうたびに自分が自分でなくなっていく乖離感も。

「おい、ぼーっとしてないで舌使えよ」

苛立った口調に、はっとする。吐き気を抑えながら、口腔を蹂躪する肉の塊に無我夢中で舌を這わせる。まずい。苦い。気持ち悪い。唇をちくりと刺す陰毛が漂わせる異臭も相まって、えずきそうになるのを必死に堪える。

「ちっ、下手くそだな。これじゃいつまで経ってもイけねえだろ」

舌打ちした男に頭を掴まれるや、

「んむ、ううづっ!!」

がつがつと喉奥目掛けて、一物が強引な抽挿を始める。塞がれた口からくぐもった悲鳴を上げる目から、涙が溢れてしまう。唇の隙間から涎と先走りが混じった汁が垂れて、顎を濡らす。

「おらっ、出すぞ！ 全部飲め！」

「んんんんんっ!!」

口の中の肉塊がびくびくと痙攣した、瞬間、苦く青臭い液体が宏正の喉をしたたかに穢した。

引き抜かれるより早く、宏正は咽せた。齒に何かが当たるの止められないまま、汚らしい音と共に白濁液を吐き出してしまう。

「……ってえな、この馬鹿！」

「ぐっ!!」

頬に衝撃が走った。殴られたのだ。口の中が切れ、どろりとねばつく苦味が鉄の味に上書きされていく。

「おしゃぶりも満足にできねえとか、つくづく使えねえ勇者様だぜ」

「どうせ魔王には勝てねえんだから、穴使って媚び売るしかねえだろ」

——ああ、そうか。

口々に浴びせられる嘲りにまみれながら、宏正は悟る。

——俺が強ければ。欠陥品でなければ。この人たちは野盗になることも彼らに襲われることもなく、平穩に暮らせていたんだ。俺のせいだ。全部、俺のせいなんだ。俺は誰も救えてなんかいなかった。

一方、尻の中で蠢く指は二本、三本と増えていた。入り口を拡げられる不快感と腸壁の奥を擦られる快感が、ぐちゅぐちゅと混ざり合う。ばらばらに動く指が一点を押すたびに、声が漏れる。大勢の観客の前で楽器として演奏されているかのような気分になる。

「ま、こんなもんか？」

ずぼ、と指が引き抜かれた。纏わりつく汚れを、シャツの残骸で拭かれる。

「それじゃ、開通といくか」

先走りに濡れた先端を、ほぐされた秘部にあてがわれる。

「あ……」

細い声が、力なく震える。

「勇者様のケツを掘ったなんて、末代までの語り草になるぜ」

「具合もしっかり書き残してやれよ」

激しい唸り声と共に、踏み固められた土の床をだんだんと踏み鳴らす音が聴こえる。  
だが、届かない。

——嫌だ、やめてくれ、それだけは。

拒絶は口元に留まり、声にできない。かちかちと小さく歯を打ち鳴らしてしまう。

狭い孔に何かが押し入ろうとしている、嫌だ、いやだ、いやだ、

【たすけて、風】

